『当院におけるインシデントレポート状況と分析』
～臨床検査科の関与～

ＪＡ静岡厚生連　遠州病院
臨床検査科　技師長　伊藤　喜章

どの病院でも種々のインシデント・アクシデントレポートを活用しているかとは思います。では実際にコメディカルの提出状況はどうでしょう？聞こえ聞く話では以外と少ないのが現状ではないでしょうか？‘チーム医療’と盛んに言われている昨今にこの状態で良いのでしょうか？看護師達のレポートでは無く、病院のレポートであり、それが医療過誤の対策になるのであるのなら検査科・検査技師の関与も必須と思われます。

当科も著しい関与があるとは言えませんが、この機会に参考になればと昨年度の当院実績を紹介していきたいと思います。

当院は、２００７年４月に病床４００の病院として新築移転しました。旧病院時代より医療安全管理室もあり、各部署にリスクマネージャーも配置して危機管理を行なってきました。むろん年数回の職員研修・実習（ＫＹＴなど）も実施しています。

【表Ｉ】

報告者職種（期首人数）		件数	比率
医師・研修医	（６１名）	18	1%
看護師	（２５４名）	1250	76%
看護助手	（３３名）	33	2%
助産師	（１２名）	37	2%
事務	（４９名）	35	2%
検査技師	（２３名）	113	7%
放射線技師	（１６名）	13	1%
薬剤師	（１２名）	12	1%
理学・作業療法士	（２８名）	13	1%
臨床工学士	（１１名）	8	0%
栄養士	（6名）	51	3%
調理師・調理員	（１０名）	22	1%
保健師	（１５名）	33	2%
その他医療職		1	0%
その他		9	1%
合計		1648	100%

当院の昨年度のレポート枚数が総計１６４８枚でした。報告者内訳は【表Ⅰ】のように看護師１２５０枚、次いで検査技師１１３枚、その次が栄養士の５１枚という結果でした。（参考にまでに期首職員数は看護師２５４名、検査技師２３名、栄養士６名です。）どうしても看護師系が多くなるのは仕方が無いのですが、検査科が二番目にきている現状をどう判断すべきか、なかなか難しい問題です。私としては喜ばしいと感じていますが、進歩が無いとなると問題です。科としても主任会と毎月のミーティングでリスクマネージャーに事例報告をさせ、リスクの共有化を求め、必要用時には部門内検討もしています。レポートも科内のインシデントばかりではなく、病棟と、看護師と、など他部署スタッフの検査科絡みのインシデント提出も多々あります。時にチクリのようなレポートになってしまう場合もありますが、レポート提出が無くその場しのぎになるのは是非とも避けるべき行為であり、お互いがお互いを成長させる為に必要と考えます。

次に当院のインシデントレポートの内容は次の【表Ⅱ】のようになりました。

【表Ⅱ】

内容	件数	比率
薬物	367	22%
麻薬	10	1%
輸血自己血	6	0%
手術	38	2%
麻酔	5	0%
検査	253	15%
処置	44	3%
診察	7	0%
その他の診療行為	95	6%
自己抜去	71	4%
事故抜去	41	2%
転倒転落	434	26%
食事	115	7%
診療録	26	2%
接遇	68	4%
その他	29	2%
合計	1648	100%

当院のまとめ方になりますのでなかなか分かりにくい点もあるかも知れませんが、細かすぎてもまとめられないのが現実であり、医療安全管理室の室長が全てのレポートの詳細を確認してでの統計になっております。検査技師からしますとすぐに中段上の検査に目がいってしまいますが、検査は院内で実施されている診療の中での検査を含んでますので、前記した検査技師報告事例とが違ってきます。

次に当院でも指差し呼称を推進していますが、その効果はどうでしょう？

【表Ⅲ】

指差し呼称で防げたか？	件数	比率
防げた	８２１	５０％
防がなかった	７８５	４８％
指差し呼称していた	４２	２％

表Ⅲのように指差し呼称をしていれば防げたか？の結果は半々の感想になっていました。既に実施している行為ですが、指差し呼称をしていれば半数のリスクが防げると職員が判断出来たのは今後の医療安全の展開に明るい材料になり得ます。

最後にインシデントの有無とレポート数との一致が職員の気持ち、緊張感の現れに繋がっている様にも思えます。部署間の温度差は明らかに有るように感じました。

業務に支障をきたすレポート作成・提出はまずいと思いますが、個人だけで終わってしまい、同じミスが減らない状態はもっとまずいです。危機管理の共有の為には、まずは１枚のレポートからではないでしょうか？

“仕事で絶対ミスをしない人”　→“仕事をしない人”という方もいます。
確かに仕事を制限すればミスを生む確立も低くなる筈です。それが正解でしょうか？

ミスは人が生きている証拠なのです。生きているからこそ一生懸命に必死に努力して、その結果出たミスは勉強（成長）になるのではないのでしょうか？。